

そんし ようかんへん
孫子「用間篇」

70 そんし い およ し お そんし じゅうまん し い せんり ひやくせい ついえ こうか まかない
孫子曰わく、凡そ師を興こすこと十万、師を出だすこと千里なれば、百姓の費、公家の奉、

ひ せんきん ついや ないがいそうどう こと と え もの しちじゅうまんけ
日に千金を費し、内外騷動して事を操るを得ざる者、七十万家。

あ まも そうねん もつ いちじつ か あらせ しか しやくろくひゃっきん おし てき じよう し もの ふじん いた
相い守ること数年にして、以て一日の勝ちを争う。而るに爵禄百金を愛んで敵の情を知らざる者は、不仁の至りなり。

ひと しよう あら しゆ たすけ あら しよう しゆ あら ちゆえ めいしゆけんしよう うご ひと か せいこう しゆう い
人の将に非ざるなり。主の佐に非ざるなり。勝の主に非ざるなり。故に明主賢將の動きて人に勝ち、成功の衆に出ず

ゆえん もの せんち せんち もの きしん と ちゆえ めいしゆけんしよう うご ひと か せいこう しゆう い
る所以の者は、先知なり、先知なる者は鬼神に取るべからず。事に象るべからず。度に験すべからず。必らず人に取り
てき じよう し もの
て敵の情を知る者なり。

71 ゆえ かん もち いつつ
故に間を用うるに五あり。

きようかん ないかん はんかん しかん せいかん ごかんとも お そ みち し な こ しんき い
郷間あり。内間あり。反間あり。死間あり。生間あり。五間俱に起こつて其の道を知ること莫し、是れを神紀と謂う。

じんくん たから きようかん もの そ きようじん よ ないかん もの そ かんじん よ
人君の宝なり。郷間なる者は其の郷人に因りてこれを用うるなり。内間なる者は其の官人に因りてこれを用うるなり。

反間なる者は其の敵間に因りてこれを用うるなり。死間なる者は誑事を外に為し、吾が間をしてこれを知つて敵に伝えしむるなり。生間なる者は反り報ずるなり。

孫子十三
用間篇 2

72

故に三軍の親は間より親しきは莫く、賞は間より厚きは莫く、事は間より密なるは莫し。

聖智に非ざれば間を用うるに能わず、仁義に非ざれば間を使うに能わず。微妙に非ざれば間の実を得ること能わず。微なるかな微なるかな、間を用いざる所なし。間事未だ発せざるに而も先ず聞こゆれば、其の間者と告ぐる所の者と、皆な死す。

73

凡そ軍の撃たんと欲する所、城の攻めんと欲する所、人の殺さんと欲する所は、必らず先ず其の守将・左右・謁者・門者・舎人の姓名を知り、吾が間をして必らず索めてこれを知ら

しむ。

敵間の来たって我れを間する者、因りてこれを利し、導きてこれを舎せしむ。



故に反間得て用うべきなり。是れに因りてこれを知る。故に郷間・内間 得て使うべきなり。是れに因りてこ

れを知る。故に死間 誑事を為して敵に告げしむべし。是れに因りてこれを知る。故に生間 期の如くならしむべし。五

間の事は主必らずこれを知る。これを知るは必らず反間に在り。故に反間は厚くせざるべからざるなり。

昔、殷の興くるや 伊摯 夏に在り。

周の興くるや、呂牙 殷に在り。故に惟だ明主賢将のみ能く上智を以て間者と為して必らず大功を成す。此れ兵の要に

して、三軍の恃みて動く所なり。